

保育者養成校における「日本語表現」の実践

— 大学の特色を活かす授業実践の試み —

Practice of "Japanese expression" in a Training School for Child-Care Worker —Attempt of educational practice using the characteristic of the university—

高木 香織

(こども学科 専任教員)

大学全入時代を迎え、大学においても、学生の基礎学力の向上が求められている。このような時勢の中で、「日本語表現」的科目は、まさに基礎力の育成を請け負った科目となりつつある。本稿は、基礎の習得を目標に組み入れながらも、本学の特色を活かした授業を目指して①基礎知識の習得、②専門性、③学生の実態やニーズ、の三点に配慮した科目、「日本語表現」の実践を報告するものである。特に、本短期大学の専門である「保育士・幼稚園教諭の養成」視点を授業に組み入れた、学生たちの就職後の職能に関わる授業内容への工夫を明らかにした。

【キーワード：保育者養成 日本語表現 授業実践】

1. はじめに

大学全入時代を迎え、大学生・短期大学生の学力低下が新聞等で取り上げられている。大学によっては、学生の語彙が乏しいため、授業が成立しない事態も起きているという。¹このような事態に危機感を持ち、新たに科目を増やしたところも含め、現在多くの大学・短期大学で日本語を教える科目（以後、「日本語表現」的科目と呼ぶ）²を開講し、学生の言語表現能力を高める授業を展開している。特に、AO入試や推薦入試での入学が主流となった一部の私立大学や短期大学では、他の講義を成立させるためにも、学生たちの漢字の読み書き能力や獲得語彙の実態等を見据えた上で、更なる基礎力の確保をさせる必然性が出てきた。

しかし一方で、授業では、専門性や学生の満足度も求められる。90分の授業で、ひたすら文章を書かせ、添削するのみでは学生達が飽きて履修しなくなった例もある。では、①基礎知識の習得、②専門性、③学生の実態やニーズ、の三点に配慮すると、どのような「日本語表現」の実践が可能であろうか。筆者は、これらを授業に取り入れるため、埼玉純真短期大学における本授業の「専門性」を、「日本語の専門」のみでなく、本短期大学の専門である「保育士・幼稚園教諭を養成する専門」とも捉えて、後者をできるだけ授業の中に組み入れた実践に取り組んできた。本稿は、学生の実態を念頭に置きながら、本学の特色や学生のニーズを考慮し、職能に関わる授業を目指した「日本語表現」科目の実践報告である。

2. 「日本語表現」的科目に求められるもの

1でも述べたように、現在「日本語表現」的科目は、多くの大学や短期大学でカリキュラムに組み込まれている。2001年に、これらの科目の指導内容について、大学の要項やホームページの記述を総合して考察した先行研究がある。三宅(2002)は、当時の指導内容を「書く(読む)指導」と「話す(聞く)指導」に分け、また更にそれを「学問的指導」と「社会的指導」に分類している。以下に、三宅の分類を筆者なりにまとめて述べる。

まず、論文やレポートなどのアカデミックな課題を遂行するのに必要な実践能力を指導するものがある。内容としては、「文献を探す、読む、まとめる、論理的に説明する」という研究の技術や、「論文にふさわしい語彙、表現、文章の組み立て方」などの表現の技術が中心となる。また、そこに話す・聞く能力を組み合わせると、「ゼミなどの発表・ディスカッション・スピーチ」といったアカデミックな活動に付随する「発表用のレジュメを作る、話す内容を構成する、聞いて理解しやすい表現を工夫する、論理的な話し方を考える」などの技術を扱うことになる。

一方、「大学生の社会行動に必要な書く能力」の育成を中心とすると、「礼状・挨拶状などを書く、就職書類を出す」などの指導が行われる。また、「大学生の社会行動に必要な、話す(聞く)能力」を中心とすれば、「さまざまな公共の場での適切な受け答え・問い合わせ、教師など大学関係者との応答、就職の面接」などの社会行動で必要な技術を取り扱うことになる

いう³。

このように、大学における「日本語表現」は、大学生としてのアカデミックな活動のための技術、もしくは大学生として必要となる社会活動のための技術の教授を中心に指導されてきた科目だと言えよう。

しかし現在、本科目に求められる内容が変化し始めている。基本的な漢字の読み書き・語彙を獲得させることも、大学・短期大学での重要な課題となっているのである。以下は、2007年4月30日付けの産経新聞の記事の抜粋⁴である。

独立行政法人メディア教育開発センターの小野博教授（コミュニケーション学科）が平成16年、33大学・短大の学生約1万3000人の日本語基礎力を調べたところ、国立大生の6%、私立大生の20%、短大生の35%が「中学生レベル」と判定された。昨年度の同様の調査では、中学生レベルの学生が60%を占める私立大学も現れた。

今年度、センターが開発した日本語基礎力を調べるプレースメントテストを利用する大学は57大学3万2000人（見込み）にのぼる。3年前の4倍を越す勢いだ。

小野教授は『『(大学) 全入時代』が到来し、外国人留学生と同等か、それ以下の日本語力しかない学生が出てきた。言葉の意味を学生に確認しながらでないと講義が進められない大学も少なくない。テスト利用校の急増ぶりに、大学側の危機感が表れている』と語った。

記事からは、多くの大学・短期大学における「日本語表現」的科目の扱うべき領域に、日本語基礎力の習得を含まざるを得ない現状が読み取れる。プレースメントテストを受けていない大学・短期大学でも、同様の事態は起こっているだろう。本学も然りである。

この現状を踏まえた上で、学生に対する指導には何が求められるだろうか。一つには、「日本語の基礎」として漢字の読み書きや慣用句・敬語等を習得させ、その上でひたすら「文章の書き方」を指導するなどの、基礎徹底型の授業が想定される。論理的文章を書く練習と、語彙の獲得だけに焦点を絞れば、基礎力に対してそれなりの効果が期待できるだろう。しかしこれで毎回の90分授業を行っていても、内容が単調になり、学生によってはうんざりする授業展開ともなり得てしまう。その上、「日本語の基礎」を習得させると言っても、どこまで何を扱うのか、その内容はあまりに茫

洋としている。

筆者は、学生の意欲や満足感を高めるためには、基礎知識の習得や日本語表現力の育成を根底におきながらも、各大学や短期大学の専門性に則り、特色を踏まえた授業を組む必要があると考える。例えば、工学系の大学であれば、語彙指導の中に一般常識だけでなく、講義でたびたび登場するであろう工学系の語彙を周知させておく、等である。特に短期大学では、特定の資格の取得を目指して入学してくる学生がほとんどであるため、学生の希望進路に合わせた授業の考案も可能である。

以上のことから、特に私立大学・短期大学における、これからの「日本語表現」的科目には、日本語基礎力の向上と、各大学（短期大学）の特色を踏まえ、学生のニーズや就職先を想定した内容という、新たな観点からの授業構成が求められるだろう。

3. 「日本語表現」の授業実践

以上述べてきたことを念頭に置き、筆者が行った「大学の特色を活かす授業実践」の試みを報告する。

3-1 「日本語表現」の授業形態について

本学は「日本語表現」科目を半期15回の講義で構成し、一年生の一般教養科目に位置づけている。必修科目ではないが、上述してきたような基礎力の現状もあり、できるだけ全一年生が受講するようという指示がなされている。少人数制を取り、1クラス最大25名編成で行う。筆者は前・後期合わせて10クラス（夜間の二部生の授業も含む）を担当した。講義内容の中から、ここでは特に、保育者を目指す乳幼児保育コースに対する授業について、本学の特色を活かそうと試みた実践を報告する。

3-2 授業と関連付けた本学の特色

筆者は、本学の特色である以下の二点を、「日本語表現」と関連付けることを試みた。

(1) 学生の進路

本短期大学では、学生のほとんどが保育士・幼稚園教諭の免許を取得する。そして90パーセント以上の学生が、夢を叶えて卒業後すぐに保育園・幼稚園等で働き始める。現在では四年制大学でも取得される資格であるが、より明確な目的意識を持って入学し、短期間で資格を取得して早く現場に出たいという学生が多い。

(2) 学内の環境

本学には、「純真の森」と名の付いた、小さな公園のような場所がある。憩いのスペースとして木々が植えられており、花や昆虫が季節の移ろいを感じさせる。また、運動場の周りにはタンポポやシロツメクサ等の草花が生えており、小さな生き物たち（雨蛙や天道虫

等）も生息している。これらは、活用によっては保育者や教育者に求められる「子どもとともに自然に感動する気持ち」⁶を養うのにとっても良い環境となり得る。

3-3. 基礎の習得や、本学の特色を活かした授業実践の概要

授業の中から、特に、本学の特色と関連させた授業とその内容について、表1に示す。

(表1 短大の特色と関連させた授業内容)

| 指導内容 | 授業内容／ 特色との関連 | 授業内容 | 本学の特色と関連させた内容 |
|----------------------------|-----------------|--|--|
| 基礎力向上のための指導 | | ①国語力アップ小テスト | 保育所・幼稚園でよく用いられる用語の読み書きを、小テストに含めて出題する。 |
| 「書く(読む)」指導 | | ②礼状の書き方 | 実習先に送る礼状を想定して、実際に書かせる。 |
| 「話す(聞く)」指導 (他者に向けた表現) | | ③絵本の読み聞かせ (絵本リスト作成) | 読む立場・聞く立場の両方を体験させる。クラスの学生達が読んだ絵本をリストにし、現場で活用できるようにする。 |
| 創作活動(表現活動) | | ④俳句・五行歌 歌合せ | 本学の中の自然に触れ、季節や小さな命に対する感動を、一定の形式の中に表現させる。 |
| 日本語史に触れる -「ことば」の不思議に迫る- | | ⑤青信号はなぜアオなのか 小松英雄著『日本語の歴史-青信号はなぜアオなのか-』より | (導入に工夫)グループを作り、相談して画用紙に〈太陽・信号・家・虹・木〉の絵を描かせる(クレヨンで色を塗らせる)ことを導入とする。自分たちが描いた絵の中に、文化による色の固定観念が存在することを知る。ヨーロッパでは太陽の色が黄色だとされていること等、文化による色の意識について講義した後、なぜ日本人は信号の色を「アオ」と呼ぶのか、語史の観点から紐解く。 |

授業内容のうち、特に①、③、④の実践について、詳細を以下に示す。

実践① 基礎力向上プログラム：国語力アップテスト

(参照 表1の授業内容①)

| |
|---|
| <p><時間数> ほぼ毎回、授業の最初の30分程度を利用。</p> |
| <p><目的> 日本語基礎力の習得と、学生参加型授業へのウォーミングアップのため</p> |
| <p><テキスト> 主に、NHK放送文化研究所日本語プロジェクトによる『国語力アップ400問』より、出題した。本テキストは、2002年にNHK放送文化研究所が、ホームページに掲載した「国語力テスト」を本にまとめ、解説をつけたものである。述べ4000人が挑戦した各問の正答率も掲載されている。漢字の読み以外は選択問題になっており、クイズ形式で解答できること、様々なジャンルの問題があること、インターネットで解答された際の正答率が載っていることが、テキスト選定の理由である。その他、保育士の就職試験の過去問題や教員採用試験（小学校全科）の過去問題からも抜粋して出題した。</p> |
| <p><内容> 漢字の読み書きや国語一般常識に相当する慣用句・四字熟語・ことわざ・文学史・敬語等について、小テストを実施し、解答・解説を行う。保育士・幼稚園教諭として働き始めた後にも、日誌やお便りで使うような漢字も出題した。「日本語表現」の時間で毎回、少しでも多くの語彙や表現に触れさせるようにと意図している。</p> <p>答え合わせの際は、クラス全体に問いかけて解答を返してもらい、解説を補足する。（簡単な問題は、多くの学生が返答するが、難しい問題は、返答をする「声」が一、二名程度しか上がらなくなる。）その場で問いかけ、解説を行うのは、習得への満足感を与え、更に「声」のある教室作りを目指すためである。習得を最終目的とするため、全ての回の小テストより、抜粋した問題を試験問題の一部として出題した。</p> |
| <p><学生の反応> テストに取り組む姿勢からは、解きたいという熱意が見られ、授業者が机間を回って歩くと、ヒントを望む声が多数上がった。その際は、適宜ヒントも与えながら、新たな知識を獲得する喜びを味わえるような雰囲気を作った。何人かの学生からは「苦手だ」「知識がない」という言葉も聞こえてきた。基礎学力に対する劣等感を持っている学生も多数見受けられたが、それと同時に漢字や敬語は特に習得しておきたいという強い意識がうかがえた。</p> |

実践③ 学生の進路に活かせる授業を目指した実践：絵本の読み聞かせ

(参照 表1の授業内容③)

| |
|---|
| <p><時間数> 5～6コマ</p> |
| <p><目的> ○相手を意識して、読み聞かせを行うことで、表現力を高めること。</p> <p>○聞く側に立って、他者の読み聞かせを楽しみ、読み聞かせに適した空間を作ること。</p> <p>○読み聞かせで発表された絵本をまとめ、絵本リストを作成し、就職先で活かせるものにする。</p> |
| <p><内容> 1. 導入…絵本で野菜嫌いを克服したという内容の新聞記事を配り、子どもに対して読み聞かせにはどのような作用があるのか考えさせる。さまざま出たところで、内容に入ることを説明し、授業者が何冊か、絵本を読み聞かせる。絵本の持ち方、ページのめくり方、絵本の特性（表紙から背表紙までが一連の物語になっていること）等、基本的なことをこの時点で伝えておく。</p> <p>2. 実践…各自、好きな絵本を持ち寄り、クラスの学生に読み聞かせる。聞く側は、純粋に絵本を楽しみ、読み聞かせが終わってから絵本リストに題名・作者名・内容・感想を書き入れる。リストには、クラス全員が持ち寄った絵本が書き込まれることとなる。</p> <p>3. 授業者…絵本に愛着のなかった学生にも、さまざまな絵本に触れることで、読み聞かせの楽しみに気づか</p> |

せ、子どもに読んであげたいという意識を持たせるよう配慮した。この時、授業者は最もよい聞き手になるよう努めた。アドバイスもするが、特に皆で楽しめる空間作りを意識した。

＜学生の反応＞ 一年生は、まだ実習前ということもあり、読み聞かせをしたことのある学生は少ない。発表後の発言で一番多いのは、「緊張した」であった。声の大きさ・早さ・物語ること・聞き手への意識等、さまざまな注意点はあがるが、他者の発表がお手本になってそれぞれのスキルアップにつながったようだ。図書館に所蔵された絵本だけでなく小さい頃から大好きだった、名前入りの絵本を自宅から持ってくる学生も見受けられ、さまざまな絵本がリストに加えられた。

実践④ 学内の環境を活かした授業実践：俳句・五行歌 歌合せ大会
(参照 表1の授業内容④)

＜時間数＞ 2コマ (1コマ：創作 1コマ：歌会)

＜目的＞ ○自然に触れ、各自の感動を俳句や五行歌に表現すること。
○歌会を通して、クラスの受講生同士の交流を図ること。

＜内容＞ 前期クラスでは、入学して間もない時期に、校庭へ出て、桜や草花等を見ての「俳句」「五行歌」の作成及び、歌合わせを行った。後期クラスは、秋の風景（学内の紅葉や蜻蛉など）を見ての創作となった。実際に景色を見ながら心に湧き上がってくる「ことば」を体感する機会として設定したが、受講生達が、それぞれの感性を知る機会ともなった。

「歌合わせ」では、無記名で載せたクラスの受講生の作品をプリントアウトし、学生一人ひとりの手元に渡るようにして、授業者が全て読み上げた。1位＝3点、2位＝2点、3位＝1点とし、好きな作品を選ばせ、点数表に好きな作品へのコメントも書いて提出させる。コメントは、最終的に作者に渡す。多くの受講生が共感した（良いと思った）作品ということで、点数の多い順に、1位～3位までを発表し、この作者には手を上げさせた。また、全作品について、それぞれ票を入れた学生を指名して、どこが良かったのか発表させる。顔と名前の一致しない時期での実施という点で、受講生にそれぞれを印象づける意図もあり、また全員が受講生から自分の作品の評価を受ける経験を通して、表現の発信に対する意識を高める効果も期待した。

＜学生の反応＞ 創作の前には「苦手」と話していた学生も、実際に外に出てみると、蛙や天道虫、クローバーなどの題材を見つけることで、創作を楽しむ姿が見られた。俳句には季節感を表すものが多く提出されたが、五行歌は制約がほとんどないため、恋愛や生活感あふれる作品が登場し、多様な内容の詩が提出された。

歌会では、作品を読み上げる中で、「すごい」「いいね」「おもしろい」など、他学生の作品に対する学生達の声が上がり、授業者の想像以上に盛り上がりを見せた。

3-4 成果

以上のように、大学（短期大学）の特色を踏まえ、学生のニーズや就職先を想定した授業を行ってきた。しかし、実際にこれらの実践が就職後に活かせるかどうかという実証的な資料を提示することは、現段階では不可能である。しかし、学生達に「将来、どのような保育者になりたいか。「日本語表現」の授業で学んだことを踏まえて書きなさい」という題で感想を書かせることにより、本授業を将来に活かそうという意識

づけをすることはできると考えた。また、各人における（授業と保育者と結びついた点での）学びがどこにあったのかも明らかにすることができるだろう。今回は、学生の感想のいくつかを、本実践の成果に代えて掲載したい。

＜学生の感想から＞

i-読み聞かせを「聞く側」に立ったことから学んだことの例-＜表1 実践③について＞

私は、子どもにたくさんの本を読み聞かせられる保育者になりたい。

私は、夏休みや冬休みは母の託児所へ手伝いに行っている。外遊びはもちろん人気だが、室内遊びとなると子どもたちは、両手にたくさんの絵本を持ってきて、「お姉ちゃん先生これ読んで。」と言ってくる。同じ絵本を四回も五回も読み、読んでいる私は毎回絵本を暗記できるのではないかと思ってしまう程だ。

そんな時、絵本の読み聞かせの授業が行われた。私は皆の発表を真剣に聞き、良いところをたくさん見て、私もまねしようと思った。読み手が上手ければ相手も興味を持って聞いてくれることも分かった。

空想の世界、子どもにとっては夢の世界である絵本。絵本を先生のように読むにはもっと経験を経なければならぬが、私なりの読み方で子ども達に夢を与え、子どもに喜んでもらえたなら私は嬉しい。絵本を通して、たくさんの世界を知ってもらいたい。(U・T)

ii 一色の固定観念の発見が、新たな保育観に結びついた例—<表1 実践⑤について>

私は、日本語表現の授業を学び、将来、保育士になるにあたっての教育観が変わった。

それは、授業で絵を描いたときに、私たちの中で、太陽の色は「赤」だというのが当たり前の考えになっていたことがきっかけだった。不思議なことに、どのグループも家の形が似ていたことにも驚いた。

私が幼稚園児だった頃は、固定観念の色に縛られず、思ったままに、見えたままに色を塗っていたものだ。現代の幼稚園児の絵を見ても、中には一人や二人は、お父さんの顔が青だったり、お母さんの顔が緑だったりする。実物は違う色だが、保育者は、「じゃあお顔は肌色で髪は黒で描きましょう。」などと言う必要はないのである。

大人の持っている固定観念を捨て、子どもが初めて触れた物や、味わった経験を、素直な気持ちで受け止めて、共に成長していけるような保育者になりたいと思う。(K・Y)

iii 読み聞かせ体験が意欲や実践に結びついた例—<表1 実践③について>

私がこの授業で特に印象に残っているのは、絵本の読み聞かせをしたことだ。今まで保育園に行ったことはたくさんあるけれど、子ども達の前で読み聞かせを

したことがなかったので、授業で皆の前で読んだ時は、とても緊張した。

絵本の読み聞かせは簡単なことだと思っていたけれど、どうしたら見えやすいか、聞きやすいか実際にやってみると難しかった。先生がやっているのを見ると簡単に見えるけれど、その中にはいろいろな工夫があるのだと分かった。また、たくさん絵本を発見できたことがとても学習になった。そして、夏休みに保育園で、子ども達に絵本を紹介することができた。

私は、子ども達にたくさん絵本を読ませてあげて、元気がない子どもなどに少しでも笑顔が作れるような保育士になりたい。(O・M)

感想の中で最も多かった内容は、絵本の読み聞かせについてであった。書かせる際の題の立て方によっても感想の内容は変化するものだろうが、授業で学んだことや発見したことを再構築し、将来に活かそうとする意識づけをさせるには至ったと考えられる。成果の確認については、今後また別の方法も見出していきたい。

4. おわりに

大学全入時代を迎え、大学においても、学生の基礎学力の向上が求められている。「日本語表現」の科目は、まさに基礎力の育成を請け負った科目だと言えよう。この「基礎力」を何と位置づけるかによって、各大学の教授内容は変化する。その際、大学の性質や学生の実態を考慮に入れる視点は、これから更に求められるだろう。

本実践は、学生の実態を受け止め、本学の良さや専門性を考慮に入れて、意欲を引き出せるような授業展開を目指したものであった。これらはまだまだ荒削りな内容であるし、効果的な授業モデルを提示したものでもない。他科目との連携も、基礎科目の役割を全うするためには必要だろう。今後も更なる研鑽を積み、様々なアプローチをしていく必要がある。しかし、筆者が特に重要視した、「学生の実態と、進路を見据えた授業構成」は今後どの取り組みを行うにしても、根底におきたい。

「読み聞かせの楽しみを知っていて、子どもに絵本を読んであげたいと思う保育者」「自然を大事に思い、子どもと共に草花に親しめる保育者」「言葉遣いの常識をわきまえている保育者」「言葉の大切さを伝えられる保育者」の育成に、基礎指導のための「日本語表現」科目も貢献できるのだ。本稿では、実践報告にとどまっ

てしまったが、今後は更に学生の学びを考察できるよう、データを取る等しながら、「日本語表現」科目の可能性について研究を進めていきたい。

(注)

1 英文解釈の講義で学生に「often」の意味を調べさせても、「しばしば」はもちろん、「頻繁に」といった訳語が理解できない。「『よく～する』ではどうか、と聞いても、『よく』は『good』の意味としてしか認識していない学生すらいる」産経新聞 2007年4月30日付けの記事より <http://www.sankei.co.jp/kyouiku/gakko/070430/gkk070430000.htm>

2 授業名としては、「言語表現科目」「日本語技法」「日本語法」などさまざまである。

3 三宅和子、「日本語表現能力を育てるとは—大学生の日本語表現能力をめぐる問題と教育の方向性—」、文学論藻、No.76、2002、pp.251-237

4 産経新聞 4月30日付けの記事より。プレースメント結果と大学生の日本語能力に関する記事は、この他にも多数書かれている。<http://www.sankei.co.jp/kyouiku/gakko/070430/gkk070430000.htm>

5 レイチェル・カーソンは、著書『センス・オブ・ワンダー』において、「妖精の力にたよらないで、生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮に保ち続けるためには、私たちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人がすくなくともひとり、そばにいたする必要があります。」と述べている。

レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社、1996、pp.23-24。

(引用・参考文献)

NHK放送文化研究所日本語プロジェクト著『国語力アップ400問』生活人新書、2003

小松英雄著『日本語の歴史 青信号はなぜアオなのか』笠間書院、2001

三宅和子「日本語表現能力を育てるとは」—大学生の日本語表現能力をめぐる問題と教育の方向性、文学論藻、No.76、2002、pp.251-237

レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳『センス・オブ・

ワンダー』新潮社、1996

(参考ウェブサイト)

産経新聞 2007年4月30日配信記事

<http://www.sankei.co.jp/kyouiku/gakko/070430/gkk070430000.htm>

J-cast ニュース 2008年1月5日配信記事

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20080105-00000001-jct-sci>